ベッティナー・フォン・アルニムの幼少期から少女期（その1）

山下 剛

I. ベッティナーの両親

ベッティナー・フォン・アルニム（旧姓ブレンターノ、1785-1859）は、1785年4月4日、帝国直属都市フランクフルト・アム・マインに生まれた。父親のピエトロ・アントーニ・ブレンターノは、1778年以降フランクフルトの《黄金の頭亭》を拠点に香辛料、染料をはじめとするさまざまな商品を扱い、ドイツ以外にも顧客を持つ一大商家を打ち建てていた。ベッティナーの母親は、ピエトロ・アントーニの2度目の妻マクシミリアーネ（マクセ）で、ドイツで成功した最初の女性作家ゾフィー・フォン・ラ・ロシュの娘だった。

ピエトロ・アントーニの父はすでに1698年には地の利の好いフランクフルトにドイツの商家を興しており、1741年にはイタリア人として初めてフランクフルトの市民権を認められている。1735年に北イタリアのトレメッツォに生まれたピエトロ・アントーニ（1735-97）は、父の死後、2人の兄とともに家業を継いだ。彼は1763年にいとこのパウラ・マリーア・ヴァルブルガ・ブレンターノ＝グノツ（1744-70）と結婚。彼女は7年間の結婚生活で6人の子どもを産み、1770年に26歳の若さで死去する。

1771年にピエトロ・アントーニは独立して自分自身の会社を興すが、イタリア出身のためによそ者扱いされ、フランクフルトの都市貴族の世界にはなかなか受け入れられなかった。政治信条が保守的で、プロテスタントの都市フランクフルトでカトリック信仰に固執したことも理由の一つだった。しかし、1774年、38歳の時にマクシミリアーネと結婚することによって、社会的地位の向上とドイツ社会への参入を果たすことになる。

マクシミリアーネ（1756-93）は、カトリックの大司教でもあるトリリア選帝侯の宰相を務めるゲオルク・ミヒャエル・フォン・ラ・ロシュの娘であった。ピエトロ・アントーニはこの婚姻を足掛かりに1777年にトリリア選帝侯の枢密顧問官、そして帝国直属都市フランクフルトの信任状を受けた弁理公使になるとともに、その豊かな財力にものを言わせて、トリリア宮廷への有力な出資者ともなっている。彼はこの頃からドイツ名ペーター・アントーンを使用するようになる。

ところで、1772年、23歳のゲーテ（1749-1832）は、コーブレンツ近郊のエーレンブライトシュタインにラ・ロシュ家を訪ね、そこで真っ黒な目の小柄でかわいらしい16歳の「マクセ」と知り合い、心を奪われる。そして彼女は『若きヴェルターの悩み』（1774年）に登場するロッテのモデルの一人となった。これは、婚約者のあるロッテとの叶わぬ恋に苦悩する主人公ヴェルターが、ついにピストル自殺を遂げる物語である。

裕福であることが良い結婚の絶対的な条件であると考えたゾフィーは、未だ将来の定まらぬゲーテに娘を嫁がせる気持ちなど毛頭なかった。彼女は相手の人柄も確かめないまま、娘を20歳年上の商人ペーター・アントーン・ブレンターノに慌ただしく嫁がせたのである。これは双方にとって利のある、いわゆる政略結婚であった。

ゲーテはブレンターノ家に嫁いだマクシミリアーネへの未練が断ちがたく、1774年1月末の結婚直後は毎日のように《黄金の頭亭》を訪ね、チェンバロを弾くマクシミリアーネとチェロの合奏を楽しんだり、二人でスケート遊びに興じたりしている。始めのうち鷹揚に構えていたペーター・アントーンも、そのうち二人の親密さに黙っていられなくなり、2月末か3月初め頃とうとう妻と口論になる。この後ゲーテの足は遠のくことになった。ゲーテはしばらくするとフランクフルトを去り、ヴァイマルへ向かうことになる。

18歳で結婚したマクシミリアーネはいきなり5人の子持ちとなり、さらに19年間の結婚生活で12人の子どもをもうける（そのうち4人は早世）。彼女は金銭上は何不自由ない生活を送ったが、夫のイタリア人氣質や商人特有の厳格な合理主義、そして夫との年齢差と育児の負担に苦しんだ。母ゾフィーは何度もフランクフルトの娘を訪ねたが、その度にその姿をかわいそうに思ったという。

II. フランクフルトでの幼少期

1793年、12回目の出産でマクシミリアーネが命を落としたとき、彼女の7番目の子どもベッティーナは8歳だった。ペーター・アントーンはその後60歳という高齢で36歳年下の貴族の女性フリーデリケ・アンナ・エルネスティーネ（1771-1817）と3度目の結婚をし、2人の子どもをもうけているので、ベッティーナは20人兄弟姉妹の13番目ということになる。

マクシミリアーネは次々と生まれる赤子の世話に大わらわで、ベッティーナにまではなかなか手が回らなかった。ベッティーナには母の記憶がほとんどない。ベッティーナは教育を拒否し、大人たちも手を焼く気まぐれで落ち着きのない娘となっていくた。しかし、彼女は孤独で寂しい思いを抱いていただけに、常に大人たちの愛情に飢えてもいた。

ベッティーナの幼少期は身近な人たちの死によって取り囲まれている。彼女は兄弟姉妹について次のように書いている。

昔々一人の子ども〔ベッティーナのこと〕がいました。その子には大勢の兄弟姉妹がいました。——一人はルール、一人はメリーネ、この子たちは妹で、その他の子どもたちはみんなずっと年上でした。この子は兄弟姉妹を全員数え上げてみました。すると13人いました。ペーターが14歳、それからテレゼとマリーが15歳、16歳、その他にもまだたく

さん。その子はでもこの人たちのことを知りませんでした。なぜならこの人たちはとっくに亡くなっていたからです。兄弟姉妹は間違いなく20人いました。もしかするともっとたくさん。この子が3歳のとき、兄のペーターが亡くなりました。この兄のことをこの子はまだたくさん覚えています。¹（以下〔 〕は筆者による説明）

この腹違いの兄ペーターとの思い出を、ベッティーナは哀切を極めた筆づかいで書き残している。

ペーターは火が燃えるようにぎらぎらした黒い目をしていたが、体に奇形がありとても小さかった。彼は家の上の小さな塔に鳩やさまざまな鳥を飼っていて、ベッティーナをよくそこへ連れて行っては、即興でおとぎ話を語ってくれた。それはそれはすてきな時間だった。クリスマスの日に二人で周りを驚かせ呆れさせる化け物遊びをしたり、庭に水が噴き出る仕掛けを作って喜ばせてくれたり、はしご登りを教えてくれたり。ベッティーナはこの兄が大好きでどこにでもついて行った。ある日の夕方遅く二人でらせん階段に立っていたとき、ペーターは急に顔面蒼白となり、驚いたベッティーナは彼にしっかりとしがみついた。ペーターはかすかに、放せ、と言ったかと思うと、ベッティーナもろとも階段から転げ落ちた。ペーターはすぐにベッドへ運ばれたが、ベッティーナが彼の姿を見ることは二度となかった。ペーターはお墓の中だと言われても、ベッティーナにはその意味がわからなかった。ベッティーナは兄が恋しくて、晩に部屋の片隅に座っているときに、何度か薄暗がりにペーターの2つの黒い目が光ってい

¹ Bettine von Arnim: Clemens Brentano's Frühlingskranz (以下Frühlingskranz), Bettine von Arnim Werke und Briefe, Bd.1, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1986, S.86-87

るのが見えたように思ったという。²

近所に住むある高貴な外国人女性が病死したときにも、ベッティーナには死の意味が理解できず、幼いなりに次のような思いを巡らしている。

死、それは何？ お墓に埋められた！ もういない！ その子〔ベッティーナ〕は、もういないということが理解できない。

そして今でも、その子は、もういないが信じられない。——いなくなったのではないわ！ 蝶がその棺から這い出して、花々の中へ飛んでいく、よく考えてみることもせず、光に酔いしれてひらひら飛び、ただもう喜びに有頂天になって。ちょうどそんなふう to 病気の人たち、疲れた人たちは体から解き放たれて、そんなふうにもっと清らかな自由な生へ昇って行くのだわ。これはすべて、五感には見えない。青虫がきれいな蝶に変身するように、人間にもそれができる。——この世からいなくなるということがどういうことなのか、その子がまた忘れることができれば良かったのだけれど！ ——³

果たして、この翌年の春には母マクシミリアーネの死が続いたのだった。

ベッティーナは父親に対してはとりわけ強い愛着を持ち、事実また彼女は父の一番のお気に入りでもあった。ベッティーナはこの父娘の関係を極めて印象的に書き残している。次に挙げるのは、8歳のベッティーナが、妻を亡くし茫然自失している父を懸命に慰めようとしている情景である。

² Vgl. *ibid.* S.87-88

³ *ibid.* S.89

父にはそれ〔妻の死〕が耐えられない。どこへ向かおうと、父は悲嘆のあまり身悶えせずにはいられない。すべてが父の苦しみから目をそむけようとする。父が入っていくと、息子や娘たちは父の前から逃げる、その子ども〔ベッティーナ〕は逃げない、その子は父の手をしっかりと握る。すると父も手を引かれるままついて行く。街灯でわずかに照らされた薄暗い部屋の中で、父は母の肖像画を前にして大声を上げて泣く。するとその子は父の首にしがみつき、両手で父の口をふさぐ。お父様、そんなに大声を上げて、そんなに嘆き悲しまないで、と。⁴

ベッティーナは、これらの経験から、生は魂を閉じ込める牢獄ではないかと考えるようになっていく。彼女は後に、カロリーネ・フォン・ギュンデローデとの交友と彼女の死によって、生と死の意味をさらに深く考えることになる。

Ⅲ. フリッツラルの寄宿学校時代

1785年以降家業を継いでいた息子のフランツは、厳格なカトリック信者である父の意向も受けて、遺された小さな妹たちに外部で教育を受けさせることにする。父は宗教教育に不熱心だった妻に対して日頃から不満を募らせていたのである。1794年5月、クニグンデ（グンダ）、ベッティーナ、ルールはカッセル近郊のフリッツラルにあるウルズラ会修道院の女子寄宿学校へ送り込まれ、まもなく一番下のマグダレーネ（メリーネ）も合流する。プロテスタントで後期啓蒙主義者でもあったゾフィー・フォン・ラ・ロシュは、カトリックの厳格な宗教教育には共感できなかったが、9歳のベッティーナだけはここでの新生活に期待を抱いた。姉妹たちは家族

⁴ ibid. S.89

の許を離れることが辛くて大泣きしたが、ベッティーナは窮屈なフランクフルトを離れることにある種の解放感を覚えていたのである。しかし彼女が最愛の父の姿を見たのはこれが最後となった。

1713年に創立されたこの学校は、裕福な家庭の娘24人を引き受け、良妻賢母教育を行っていた。根本にあるのはカトリックによる宗教教育だが、できる限り強制や処罰を行わず、子どもたちを自然に伸び伸びと成長させるという方針が採られていた。

娘たちは宗教上の日課をこなす他に、いわゆる読み書きそろばんを学び、家庭の切り盛りに必要とされる技能を身に付けなければならなかったが、聖書の物語に対して子どもなりの素朴な批判も自由に行うことができた。ベッティーナはしかしカトリックには批判的であり、寄宿学校時代を幸せだとは思っていなかった。カトリックの宗教教育は自我や自由の感情を抑圧し、俗物や迷信家を育てることにしかならないと感じていたからである。ベッティーナは次のように書いている。

私はあの子ども時代にどんなことを経験したか。——根っこ、草花、ちょっと押すと種が飛び出してきた花卉——これらが私にはあらゆる迷信の対極にあるものの証しであり誓いでした。先生たちは私に、自由であれ、といつも同じことばかり言いますが、それでいて信仰命令となるとどれもこれを否定するのです〔・・・〕。ではそれに対して私が教わったこととは何だったでしょう？——ああ、とても不可解で、それを口真似して繰り返すために、私たちは機械にならなければならなかったのです。⁵

⁵ Frühlingskranz, S.70-71

それでも、学校は芸術教育にも力を入れていたため、ベッティーナはここで針仕事の高度な技術を習得し、さらにギター演奏の初歩、絵画制作までも学んだ。

授業に真面目に取り組まず勝手気ままな生活をしていたベッティーナは、周りから狂人扱いされることも多かったが、先生の尼僧たちは彼女を咎めたり拘束したりすることは決してなかった。ベッティーナの宗教教育はむしろ教室以外で行われたのである。

修道院にはいくつかの庭や小さな農園があり、ベッティーナは尼僧たちと花や野菜の世話にいそしんだ。そこでは養蜂も行われており、「蜜蜂のお母さん」と呼ばれていた老尼僧が、蜜蜂と仲良しになりたければ、恐怖に打ち克ち、ぶんぶん唸る蜜蜂の只中でじっと座ったまま、決して身じろぎをしてはいけない、と彼女に諭した。落ち着きがなくなりな躰もされていなかったベッティーナもここから克己心や勇敢さを身に付け、蜜蜂の世話に熱心に取り組むようになっていった。⁶

ベッティーナは夜にしばしば宿舎を抜け出し、恐ろしくもありまた優しく自分を包んでもくれる自然と一体化して一夜を過ごしたりしている。ある嵐の夜に大木の下で雨宿りしていた彼女の目には、稲光と雷鳴に逃げまどい、教会の鐘を鳴らして必死に連禱を唱える尼僧たちの姿が、とても愉快に見えた。彼女はすべてを包んでもくれる自然の中に慰めを見出し、底知れぬ孤独や寂しさを忘れることができるようになっていった。⁷

⁶ Vgl. Bettine von Arnim: Aus meinem Leben. Ein Lesebuch von Dieter Kühn (以下、Aus meinem Leben), Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 2009, S.16-17

⁷ Vgl. ibid. S.21-22

〔・・・〕そこにはそれはみごとな枝を持ちビロードのような大きな葉を茂らせた大木があり、その葉は緑の屋根のように広がっていました。私はよくその冷んやりとした丸天井の下に横になり、木漏れ日が差し込んでくる様子を見上げました。そして私は胸をはだけてそこでぐっすりと眠りました。そう、私は愛の甘美な贈り物を夢で見たのです、間違いありません！ そうでなければ、目覚めたとき、その木のことを理解できなかったでしょう。というのも、熟した実がちょうど枝を離れ、私の胸の上に落ちてきて、その果汁が私を潤したからです、桑の実のこの美しい、黒ずんだ、熟し切った血が。私はこの実のことを知りませんでした。それまで一度も見たことがありませんでした。しかし私の唇は迷うことなくその実を貪るように食べたのです。まるで恋する者が初めての接吻を貪るように。つまり、桑の実のような味がすると感じられる接吻があるのです。⁸

ベッティーナは尼僧たちの姿をただ単に批判的に見ていたわけではない。彼女は尼僧たちに温かい眼差しを向けてもいる。

ベッティーナは、庭の手入れや養蜂を教えてくれた心優しい老尼僧が亡くなったとき、涙を流すことはなかったが、一人の若く美しい女性が俗世を捨てて尼僧になるときは、嗚咽を抑えられなかった。ベッティーナは付き添いの天使役として儀式に参加していた。女性がキリストの花嫁になると司祭に誓った後、真珠やりボンが編み込まれた長い美しいブロンドの髪が切り落とされた。ベッティーナはそれを金の皿に受け止めたとき、その髪の上に涙がこぼれた。そして祭壇に歩み寄り、それを司祭に引き渡すときには、こみ上げる嗚咽を抑え切れず、会衆たちもみな涙を誘われたと

⁸ ibid. S.24

いう。⁹

ベッティーナはこの女性に密かに同情を覚えていたのである。この女性はフランス革命によって他の大勢の貴婦人や騎士たちとともに国を追放され、この修道院にやってきたのだが、その後ただ一人ここに残ったのだった。あるとき婚約者か夫らしき男が彼女を訪ねてきたことがあった。二人は修道院の庭の木陰で熱い抱擁を交わして別れた。この女性はその後もよくその庭の寂しい並木道をそぞろ歩いていたが、男との再会は叶わず、とうとう尼になる決意をしたのだった。¹⁰

ベッティーナが涙を流したのは、宗教的な感動からというより、人に対する自然な愛情からではなかっただろうか？ ベッティーナは後年になっても、この寄宿学校時代のことを度々懐かしく思い出し、尼僧たちへの感謝の気持ちも忘れなかった。大胆さ、自由な発想と行動の自発性、弱い者に対する連帯感など、彼女のその後の活動の原型はこの時代に作り上げられたと言っていいだろう。

1797年3月、父親が亡くなり、11歳のベッティーナに大きな転機が訪れる。数週間後にフリッツラールは退却してきたナポレオン軍によって占領され、寄宿舎にいたベッティーナ、ルール、メリーネの三姉妹は、危険を察した義兄のフランツによってフランクフルトに連れ戻され、7月末にフランクフルト近郊のオッフェンバハに住む祖母ゾフィーの許に引き取られることになる。

⁹ Vgl. *ibid.* S.28-29

¹⁰ Vgl. *ibid.* S.30

IV. オッフェンバハの祖母の許で

かつて『シュテルンハイム嬢の物語』（1771年）で一世を風靡したゾフィー・フォン・ラ・ロシュ（1731-1807）も、今は年を取り、流行遅れの古臭い道德の代表者と見なされていた。そして雑誌「ポモーナ」を主宰し女子教育に関する提言も続けてはいたものの、もはや脚光を浴びることはなくなっていた。3人の孫娘を引き取ったとき、ゾフィーはフランクフルト近郊のオッフェンバハに住んでいた。ここはこれから都市へ発展しようとするところで、豊かな自然がまだよく残されていた。

1780年に夫ゲオルク・フォン・ラ・ロシュ（1720-88）はトリリア選帝侯への宮仕えを終えていた。さらにフランス革命後は政治情勢が変化し、トリリアからの財政支援も打ち切られたため、一家の財政は急激に逼迫していった。結婚後に義父ゲオルクの力で社会的地位の向上を果たしたペーター・アントーン・ブレンターノは、その見返りに早くから財政援助を行っており、オッフェンバハのドーム通りに屋根裏部屋付きの質素な二階家《グリレンヒュッテ》〔「きまぐれ小屋」の意〕を買い、1788年に義父一家をここに住ませたのである。ここへ転居してほどなく夫ゲオルクが亡くなり、また家計が逼迫すると、ゾフィーは自作出版や裕福な友人たちからの援助によって何とか窮地を脱しようと虚しい努力をした後、教育家としての評判を生かして、私塾を始めていた。ブレンターノ家への依存を強めていたゾフィーは、1797年に孫娘の教育を一手に引き受けることによってかろうじて収入の道を得たのである。ベッティーナは中断を挟み、13歳からほぼ10年間をここで過ごすことになる。

ところで、修道院には鏡がなかったため、ベッティーナは自分がどんな顔の持ち主かわからなかった。祖母と2人の妹と4人で4年ぶりに鏡を前にしたとき、ベッティーナはとても驚いた。そこに一人だけ全く見知らぬ

少女が映っていたからである。燃えるような目、熱く上気した頬、細かく縮れた黒い髪。ベッティーナの胸は高鳴り、そして思わず涙が流れた。ベッティーナは鏡の少女に付き従い、彼女に忠誠と信頼を約束しなければならないと感じたという。¹¹

ベッティーナは祖母の家では体系的な教育は受けなかった。それは女子教育の専門家として一家を成した祖母の教育観に反することであり、フランクフルトのブレンターノ家もそれを望まなかった。夫の良き連れ合いとなるには、過度な学識は不必要とされたのである。家庭における女性の徳目を過度に重視し、自分をそれに押し込めようとする祖母の古い考え方に、ベッティーナは到底ついて行けなかった。ベッティーナにあてがわれた科目は、歴史、言語、音楽、それにわずかばかりの自然科学だった。ベッティーナは教育を拒否した。中でも無味乾燥な歴史やラテン語の授業に対しては、激しい反発を示した。彼女は自分の中に見出し、自分が良いと思ったことにしか従わなかった。普段は孫たちにとっても優しくしたゾフィーも、言うことを聞かないベッティーナにはときに激昂することもあった。

1801年にゾフィーを表敬訪問したイギリス人ヘンリー・クラブ・ロビンソンという人物が、ベッティーナについて次のような言葉を残している。

私が初めてフランクフルトに行ったとき、彼女は背が小さくてずんぐりした傍若無人の少女で、フォン・ラ・ロシュ夫人の一番下(?)の一番好感の持てない孫だった。常に彼女は気まぐれな手に負えないものと見なされた。私は今でも覚えているが、彼女は次から次へと林檎の木に登ったし、ものすごいおしゃべりだった。また、彼女は大げさな表現で

¹¹ Vgl. *ibid.* S.31

『ヴィルヘルム・マイスター』のミニオンへの感嘆を語った。彼女は両手を胸に押し当てて、こう言うのだった。「ミニオンを真似て、いつもこうして寝ているの」¹²

兄クレメンスは密かにベッティナーの教育に乗り出し、妹に落ち着いて持続的に読書し勉強するようにと忠告したが、ベッティナーは次のように返信している。

でも私の魂は情熱的な踊り子なのです。それは私にだけ聞こえて他の人たちには聞こえない心の中の舞曲に合わせて跳ね回るので、みんな私に落ち着きなさいと怒鳴るけれど、それにお兄様も、でも踊りたくてたまらなくて、私の魂にはお兄様たちの声が聞こえなくなってしまうの。それで、もし踊りをやめてしまったら、私は私ではなくなってしまうでしょう。¹³

ベッティナーはヘルダーとの初対面の様子を極めて印象的に書き残している。ヘルダー（1744-1803）は若き日のゲーテに多大な影響を及ぼし、「シウトウルム・ウント・ドラング」運動のきっかけを作った思想家・プロテスタントの牧師であった。彼は理性を過度に重視する啓蒙主義を批判し、人間が持つ「自然」の感情を解放し、そこから文学を生み出すべきだと主張した。彼は初対面にしてベッティナーの本質を鋭く見抜いている。

呼び鈴が鳴り応対に出たベッティナーは、客の男からいきなり接吻された。ベッティナーは平手打ちを返し、激怒して男の顔を睨みつけた。男は

¹² Fritz Böttger: Bettina von Arnim, ein Leben zwischen Tag und Traum, Berlin (Verlag der Nation) 1986, S.36

¹³ Frühlingskranz, S.61

ベッティーナの行為に驚いたり憤慨したりする様子もなく、にこやかな表情を変えない。男を祖母の部屋に通すと、ベッティーナの驚きは恐怖に変わった。その男はヘルダーだったのだ。祖母とヘルダーは久しぶりの再会に何度も何度も抱擁し合った。ヘルダーはそのとき祖母の肩越しに、接吻のことは口にしないようにと目配せしてきた。ベッティーナも、平手打ちを喰らわせたことを黙っているようにと目で訴えて、控えの部屋に下がった。しばらくすると、孫娘が3人ともヘルダーの前に呼び出された。ヘルダーはすぐにベッティーナに歩み寄り、頭に手を置いて、ゆっくりと厳かにこう言った。

この子はとても自立心が強いように見えます。神がこの贈り物をこの子の幸せのための武器として分け与えたのなら、この子にはこれを安全に使ってほしいものです。皆がこの子の勇敢な意志に従い、誰もこの子の考えを潰そうと考えないでいただきたい。¹⁴

ゾフィーはこの祝福の言葉をかなりいぶかしく思った。さらに驚いたことに、自分のお気に入りの2人の孫娘には祝福の言葉がもらえなかったのだった。¹⁵

ベッティーナの証言には虚構が紛れ込んでいることも多いとされているため、ヘルダーが本当にこう語ったのか定かではないが、少なくともベッティーナはこの言葉によって少女時代の自分の生き方を強く肯定しようとしたことは確かだろう。

¹⁴ Aus meinem Leben, S.39

¹⁵ Vgl. *ibid.* S.38-39

ベッティナーに「自由」というものを深く考えさせるきっかけとなったのが、フランスからの移民で名門貴族の王女ド・ガシェ夫人という人物であった。彼女は1801年11月にオッフエンバハにゾフィーを訪ねてきた。王制を支持するこの女性は、その勇猛果敢な行動によって途方もない力を発揮していた女傑だった。クレームスはこの女性をジャンヌ・ダルクのように絶賛しており、彼女からいろいろなことを学ぶようにと、ベッティナーに書き送っていた。自身の信念を行動原理とするド・ガシェ夫人は、「自由」を体現する存在であり、ベッティナーは心惹かれるものを強く感じたが、一方で警戒心も持ち、一定の距離を置いて接した。

いよいよ帰国というとき、夫人のお供のうちの一人がウィスキー〔一頭立てで二輪の小型馬車〕に乗り込むと、彼女は自惚れを感じさせる優美さでさっと馬に飛び乗り、まるで私にこう言おうとするように敬礼しました。あなたも馬に飛び乗りなさい、あなたを縛り付けているものをすべて振りほどいて、いらっしゃい、私を信じて、私があなたに手を差し伸べましょう、と。——そして夫人は去って行きました。それから私は庭へ駆け出し、ポプラの木によじ登りました。私はどこへ行くべきだったでしょう、はるか彼方へこんなにも憧れているのだから？ 馬上で夕風がざわざわと大急ぎで吹き抜けて行きます！ ——そしてもし私にそれができていたら、私はそこに私のすべての幸せを見出すでしょうけれど、そして私がそのときどう考えるか、全部お兄様にお話ししなければなりません。¹⁶

ベッティナーはぎりぎりのところでド・ガシェ夫人の誘いに乗ることは

¹⁶ Frühlingskranz, S.68

なかった。未だどこへ向かうべきか自分でもわからずにいたベッティーナがもしこの女性に全面的に従ってしまえば、それは自由を求めていた彼女が新たに別の規範に縛られてしまうことを意味したからであろう。

ベッティーナは自分の心の中がどのように見えるかを祖母に語った様子を兄クレメンスに書いている。

〔・・・〕広い世界を私は駆け巡りたいと思いました。そして無花果^{いちじく}の木の下に横になり、無花果が私のお腹の上に落ちてくるのを待ちます。そうすると将来のことなどみんな忘れてしまいます。おばあ様にはこれが全部気に入りました。おばあ様は詩的な幻や心の在り処について話し、魂というものは、しばしば肉体とはまったく違った気候風土の下で栄えることがある、と話してくれました。——それから、とおばあ様は言いました、旅をすると、魂がくつろげる場所に行き着く。そこで人は魂と巡り合い、初めて魂の個性を理解することを学ぶのだ、と。

本当よ、クレメンス兄さん、私の中には幻たちの遊び場があるの。自然全体がずっと広がっていて、それは力強く脈打って溢れんばかりに花開き、朝焼けが私の魂に差し込んで、すべてを照らします。私が両手の親指で目を押さえ、頭をしっかりと支えると、この大きな自然の世界が私のそばを通りすぎ、それが私をうっとりさせます。空が、星座で覆われ、ゆっくりと回り、星座は通りすぎていきます。それから花盛りの木々が大気の絨毯を色とりどりの光線で射抜きます。このようなものが全部本当であるような国はあるでしょうか？ そして私には向こうにある別の世界の在り処が見えるでしょうか？ ——それをよく考えてみて

¹⁷ ibid. S.117

ください。¹⁷

ゾフィーはベッティーナに手を焼きながら、地に足が着いていない彼女の問題点を最も良く理解していたのかもしれない。ベッティーナには「いま」「ここ」がすべてであり、心の中のさまざまな思いや空想を何かに向けてまとめ上げていく方法を、まだ手にしていない。彼女は空想の世界を飛び回っているのである。

しかし、そんなベッティーナの行動には、有無を言わせぬ決然たるものがあった。いくつかの逸話を紹介しよう。

《グリレンヒュッテ》には野性味の残る庭があり、ベッティーナはここでさまざまな体験をしている。

春になるとアカシヤの木が花びらを庭に降らせる。その様子を見るのが祖母の楽しみだった。祖母はよく目を輝かせて庭の手入れをしていたが、木々の枝や蔓つるにまで細やかな愛情を注ぐそのときの姿はこの上なく気高いものだった。

ところがある日哀しい出来事が起こる。祖母は鶏たちのために撒いた麦粒を一羽の鶏があつという間に平らげてしまったことに腹を立て、それを潰して食卓に供しようとした。これはひよこのときからメリーネがかわいがっていた鶏だった。たまたま台所を通りかかったベッティーナは、料理女がその鶏を両膝で挟んで腰かけに座りナイフを研いでいる姿を目にすると、ためらうことなくその腰かけを引き抜いた。鶏はものすごい悲鳴を上げて大慌てで台所の窓から逃げていき、悲鳴を聞いた鶏小屋の他の鶏たちも一斉に騒ぎ出した。ベッティーナ自身も自分の大胆さに大いに驚いた。後を追いかけて、やっとの思いでこの鶏を捕まえたベッティーナは、ほとぼ

りが冷めるまで庭師にしばらく預かってもうことにする。飼い主を信頼して疑いもしない生き物を、不意打ちして食べてしまうという考えにベッティーナは激しい憤りを覚えるのだった。¹⁸

ベッティーナは、初期ロマン派の詩的な精神を忘れて効率ばかりを考える小市民を「俗物」と呼んで批判しているが、彼女は庭の植物にあれほど深い愛情を示す祖母の中に、鶏を胃袋を満たすただの食料としか見ない「俗物」性を見出し、複雑な思いに捕われたことだろう。

次に、オッフェンバハにナポレオン軍が攻め込んできたときの彼女の行動を紹介しよう。

一家は激しい砲撃を避けるために家の地下室に逃げ込んだが、祖母ゾフィーはラファエロ作とされる聖ヨハネの絵を何とかして上の広間から救い出したかった。使用人の男がその危険性を懸命に説明している中、ベッティーナはこっそりと抜け出し、勇敢にも一人でその重い絵を壁から下して背中に担ぎ、あっという間に地下室へ持ち帰った。皆は驚嘆し、祖母は大喜びした。ベッティーナは書斎の鍵を託され、その後さまざまなものも救い出した。¹⁹

この直後に、ベッティーナは赤マントを着た騎兵に追われるフランス人の若者をかくまった。彼女は手に感謝の接吻を受けたとき、嬉しくて笑ったが、それから自分が一人の人間の命を救ったのだという事実に感動し、思いがけず涙が溢れた。彼女は中庭にある薪小屋たきぎに若者を隠し、家族にも隣人にも気づかれないように細心の注意を払い、機転を利かせながら、傷

¹⁸ Vgl. *ibid.* S.181-182

¹⁹ Vgl. *Aus meinem Leben*, S.33-34

の手当、食事の世話、着替えの調達をやり遂げた。危険が去ったとき、彼女は自らの貯金をすべて若者に手渡し、手を取ると、月明かりを受け花の香りが漂う庭を抜け、逃げ道となるメイン川を目指した。別れのと看、若者はベッティーナを抱き上げ、包帯を巻いた頭を彼女の胸に埋めた。ベッティーナは両腕を若者の頭上で合わせ祈りを捧げた。若者はベッティーナに接吻し、メイン川に続く庭へと消えていった。²⁰

もう一つ、ユダヤ人少女との交友もベッティーナを知る重要な逸話である。ベッティーナは刺繡を教えてくれるファイルヒェンという名のユダヤ人少女と仲良くしていた。ある日の早朝、ベッティーナがこの少女が家の玄関前の階段を掃除するのを手伝ったが、その話を伝え聞いたメーン伯母から厳しく叱責される。ユダヤ人と付き合うなど身を持ち崩したも同然だ、自分自身をまったく粗末に扱ったものだ、というのであった。ベッティーナは笑わずにはいられなかった。そしてもう二度と伯母の礼儀作法の規則には従うまいと決める。兄のクレームスも伯母と同様にベッティーナの行動には否定的だった。ファイルヒェンは刺繡の仕事で祖父と亡くなった兄の二人の子どもを養っているとても感心な少女だった。家族が何と言おうと、ベッティーナはユダヤ人に対する世間一般の偏見に囚われることなく、その後も自分の意志で刺繡の仕事を手伝い、この少女との連帯感を持ち続けた。²¹

後年、常に弱者の側に寄り添い社会の変革を目指すことになるベッティーナの原点を、ここにも見出すことができるだろう。

²⁰ Vgl. *ibid.* S.35-38

²¹ Vgl. *Frühlingskranz*, S.20-22

若き日のヴィーラントの婚約者であり、彼の紹介で『シュテルンハイム嬢の物語』を出版したゾフィー・フォン・ラ・ロシュは上流階級や貴族との交流も多く、ベッティーナに「感傷主義」の文学を読ませ、膨大な蔵書も自由に使わせた。しかし、ゲーテの『ヴェルター』や『ヴィルヘルム・マイスター』を評価せず、新しいロマン派の文学をベッティーナから遠ざけた。兄のクレメンスはベッティーナへの手紙で、祖母の「感傷主義」に飲み込まれないようにと注意を喚起している。

1800年当時ゾフィーはフランス革命に反対の立場を取るようにになっていたが、崇拜するミラボーの手紙の抜粋を作ってそれをベッティーナに与え、感銘を受けた文章を格言として心に刻むようにと求めた。²² フランス革命が始まって10年余り経過した当時、革命の初期にミラボーが提唱した立憲君主制という考え方はパリではとっくに葬り去られていた。しかしゾフィーの居間に集まる亡命貴族や移民たちの間では、これが未だに熱く議論されていたのである。ベッティーナが生きたドイツは、封建主義による旧体制が急激に衰退し、これに代わる新しい秩序が確立される以前の混乱の中にあった。議論は百出していた。ミラボーの立憲君主制という考え方は、三月革命前後にベッティーナが理想と考えた政治体制と近い。ベッティーナは祖母の言葉やフランス革命を巡る大人たちの議論に混乱を覚えながらも、そこから古い因習への反抗の精神や自由を求める激しい情熱と衝動を学んだ。そして、民衆を愛し、さまざまな改革を命がけで断行していく政治的英雄への関心を高めていった。ミラボーの言葉「習慣の力は、どんなにすばらしい天才もやっとの思いで断ち切る鎖である」がベッティーナの座右の銘となる。²³

²² Vgl. *ibid.* S.22

²³ Vgl. *ibid.* S.22

ベッティナーは夫アルニムの死後、50歳になってから作家活動に入る。彼女は文章によって現実の問題点を指摘し、正義を求めて闘う社会運動家となっていく。その原点は、この幼少期と少女期に多くが築き上げられていったと言っていいたいだろう。

参考文献

本文中では言及しなかったが、執筆にあたって参考にした主な文献は次のとおり。

- ・ Ingeborg Drewitz: Bettine von Arnim, Romantik — Revolution — Utopie, Düsseldorf/Köln (Eugen Diederichs Verlag) 1969
- ・ Bettine von Arnim Aus meinem Leben, zusammengestellt und kommentiert von Dieter Kühn, Frankfurt am Main (Insel Verlag) 1982
- ・ Hermut Hirsch: Bettine von Arnim, Reinbeck bei Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verlag) 1987
- ・ Konstanze Bäumer/Hartwig Schultz: Bettina von Arnim, Stuttgart/Weimar (Verlag J.B.Metzler) 1995
- ・ Michaela Diers: Bettine von Arnim, München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 2010